



Close up

「変わるべき時」 学長 鈴木 佳秀

卒業式・記念パーティーのご報告/卒業生からのメッセージ
合同企業説明会のご報告/アジア・ユース・フォーラムに参加

教職課程での学び/研究成果・卒業論文発表会
退職教員・新任教員からのごあいさつ



つきたてのおもちが 引き出す笑顔

新春恒例の「留学生交流もちつき大会」を1月16日に開催しました。今ではあまり家庭で行われなくなった“もちつき”を通して、日本の伝統文化に接してもらおうのが狙いです。

外国人学生や日本人学生、教職員、さらに地域の国際交流団体の関係者ら約100人が集まり、つきたてのおもちを味わいました。敬和学園大学には現在、中国やロシア、イタリアなど5ヶ国40人の外国人学生が在籍しています。学生たちは、力強く杵を振る仲間を見ながら「ヨイショ！ヨイショ！」と大歓声を上げていました。

もくじ CONTENTS

Close up	1
「変わるべき時」 学長 鈴木佳秀	
第18回卒業式・卒業記念パーティーのご報告	4
卒業生からのメッセージ	6
英語文化コミュニケーション学科卒業 計良愛奈	
国際文化学科卒業 伊藤佳奈子	
共生社会学科卒業 後藤アイ	
就職支援の試み 合同企業説明会のご報告	7
アジア・ユース・フォーラムに参加.....	8
大学で学ぶ意義をつかむ 研究成果・卒業論文発表会 ...	8
教職課程での学び	9
退職する教員からのごあいさつ.....	10
英語文化コミュニケーション学科 平塚博子	
新任教員からのごあいさつ.....	10
共生社会学科 川本健太郎	
人文学部 ジュティス・カンバラ	
卒業生リレーエッセイ②.....	12
「感動を届ける仕事」 小林和美 (11期生)	
キャンパス日誌 (1月～3月)	13

〈表紙写真〉
卒業式での柴野和記さんによる答辞 (p.4)

変わるべき時

二〇一二年の新しい年を迎えました。皆さまは、どのような気持ちでこの年を迎えられたでしょうか。昨年の三月十一日に発生しました東日本大震災とその後の福島第一原子力発電所が原因となった放射能汚染のため、二〇一一年は多難な一年となりました。わたくしには、忘れることのできない一年となりました。重たい気持ちで、厳粛な想いで、新年を迎えたことは言うまでもありません。それは、自分自身の生き方を変えなければならぬと問われているように感じたからです。

大震災と大津波で、多くの方々が亡くなられました。まだ行方不明の方々がおられます。愛するご家族やご自宅を失った被災者の方々、職場そのものを失った方々、ご自宅と共に思い出の品をすべて流されてしまった方々、こうした方々の報道を見聞きすると、特に被災者の方に対するインタビューを聞くと、涙が溢れてしまうことが度々でした。放射能の危険を避けるため、多くの方々が故郷を後にして避難地に向かわれましたし、今もそこでの生活を強いられています。津波の被害に遭わずにご自宅が残った方々も、未だに戻れずにいます。一年が経過しても、被災地

の放射能除染や、汚染されたがれきの撤去は一向にはかどっていません。政府の発表や当該企業の責任者の語り口を見聞きするたびに、何ということだと怒りがこみ上げてきます。

このたびの大災害に、日本だけでなく、世界中の人々が心を痛めました。無力感や脱力感に襲われた方も多いため、世界が悲しんでいます。かつての阪神淡路大震災や中越地震、中越沖地震の時も同じでした。しかし今回は、放射能汚染が加わっています。東日本大震災直後に、胸がつぶれるような気持ちで書いた一文を、今も時々思い出します。新約聖書のローマの信徒への手紙の一部を引用して、「学長室だよね」に書いたものですが、言いようのない気持ちを吐露したものでした。当時も今も、その気持ちは何も変わっていません。卒業生を送り出し新入生を迎える時期になりましたが、自分に言い聞かせるため、それをここで改めて引用させていただきますと思います。

●地震による被災者を覚えて

二〇一一年三月十一日一四時四六分に発生したマグニチュード九・〇の大地震により、巨大な津波が発生し、未曾有の死者が出てしまいました。深く哀悼の意を表したいと思います。かつて阪神淡路大震災や中越地震、中越沖地震を経験した時にも、無力さを痛感させられました。残された

Close up

敬和学園大学長
鈴木 佳秀



者が力を合わせて立ち上がることに、互いに助け合うことが最も大切です。そのことに誰しも異論はないでしょう。

不思議なのは、こうした時を狙って人の生死を分かつのは何かと問いかける人が出てくることです。不幸に落ちるのは必然性があるのだと恐怖心をあおり、営利目的で宿命からの解放をちらつかせ、団体への加入を働きかけたりするので。吉凶判断で人の運命がわかると信じるのは自由ですが、尊い生命を奪われたご家族の悲しみを癒す説明にはなりません。まして死は本人の宿命であるかのごとき託宣は、残酷です。

「祝福を祈るのであって、呪ってではありません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマの信徒への手紙二二章一四節・一五節)が、われわれ



被災者支援のために集まった
学生・卒業生・教職員たち(Keiwa HOPE)

が信じる共生の理念です。今は、悲しむ人と共に悲しみを分かちつつ、何ができるかを考え、実行すべき時ではないでしょうか。(二〇一一年三月二四日)

●立ち上がった学生たち

声高に言うまでもなく、数えきれないほどの人々が、ボランティア活動に従事するため立ち上がりました。被災された方々のみで避難してこられた方々を、地方自治体が率先して受け入れました。地元の新発田市も聖籠町も、行政をあげて彼らを受け入れ、できうるかぎり力を尽くして援助の手を差し伸べました。私人であれ公人であれ、さまざまな立場にある方々が、事前に申し合わせたわけでもないのに、混乱なく、お互いに助け合っていたのです。それを見て、未曾有の災害がこの国のあり方を変えるのではないかと感じたのは、わたくしひとりではないと思います。

本学の若者たちも、Keiwa HOPE (Helping Other People) を組織して教職員と共に、直ちに活動を開始したことは、記憶に新しいことです。開学以来、ボランティア活動を教育理念としてカリキュラムに組み入れ、それを実践してまいりましたが、学生諸君による自主的な組織作りがスムーズに展開したことは、驚きでもありませんが、考えてみれば自然な流れであったように思われます。彼らの働きぶりに、大いに慰められ



Keiwa HOPEによる募金活動(バイクセール)

たことも事実です。

被災者の方々の苦しみはまだ続いています。放射能汚染という目に見えないものと戦わなければならないだけでなく、心をおおっている言いやうのない不安、展望のない絶望感とも戦わなければならないからです。ある方がぼつりと語っておられたように、何時までも人の助けを頼りにしているわけにもいれない、何時までも苦しい顔をして悩んでいる場合でもない、というのです。彼らのなかには、ご家族をつれて避難してこられた方も多くいます。ご家族が分かれて、別々の場所で避難生活をしている方もおられます。避難先でも、いつも通りの生活をしなければならぬと思っておられるからでしょう。ご家族や職場を失った方々は、どこでどのようにして人生を組み立て、

かつての生活とは言わないまでも、限りなくそれに近い状態を、何時になれば取り戻すことができるのでしょうか。

●今、私たちにできること

彼らの姿を見聞きしながら、わたしたちに何ができるだろうか、誰しも考えたのではないだろうか。被災者の方々から教えられたことは、今回の大震災や彼らの避難生活を忘れずにいること、彼らに強いられている不自由な生活を覚え続けることが、わたしたちに求められているということ。それは小さなことですが、大切なことだと思えます。精神的な支えを必要としておられるというニュースや談話、論評、解説をよく耳にします。精神的な支えとは何かと問えば、その答えは簡単ではなく、言葉にするの



Keiwa HOPEによる被災民家の清掃活動
(岩手県大槌町)

も難しいと思われませんが、地域で助け合い、支えあって一緒に生活を続けるというだけでも、当事者の方々には大きな支えになるということを教えられました。

自分に何ができるだろうかと考え、直ちに行動を開始した方々もたくさんおられるのを知っています。すべての人が、軽やかにフットワークを使ってく、誰かのために活動できているわけではありません。望んでいても、すぐにそれができない人もおられます。職業柄、個人的には、精神論や哲学、倫理学の言葉や概念、宗教的観念等をふと思いつかべてしまいがすが、思いだけでは人を支えることにはならないのです。それはよく分かっているつもりです。大学という教育機関に長く奉職していましたので、まさにこういう時に、自分に何ができるかと自問自答すると、たいしたことできない自分は無力感を感じ、打ちのめされてしまうのです。だからといって、諦めているわけではありません。考えているだけで、何もできないと釈明しているのでもありません。堂々巡りをしながら、やはり、先ほど引用させていただいたローマの信徒への手紙の一節にわたくしは立ち帰ってくるのです。悲しんでいる人と一緒に涙する勇氣、喜んでいる人と一緒に喜びを共にする率直さ、苦しんでいる人に寄り添い、その人の幸せを祈り求める気持ち、大切だと思わされています。それならわたくしにもできることではないか、と自分に言い聞かせています。そこから出発

すれば、自分にもできることが見えてくるように思われます。

ひとりひとりにできることは限られているかもしれない。しかし、その思いや気持ち繋がりが始めると、ジャスミン革命と同じように、現実を変える大きな力になり得ると信じています。人を愛する心、子供たちを慈しむ心、誰かのためにお役に立ちたいという気持ち、それが自然に湧き溢れてくるのであれば、この国は確実に変わります。そこに希望があります。実際にそのような方々が大量に、目立たないところで一生懸命に活動し、働いておられるのですから、この国は必ず変わると確信しています。同じように、わたくしも変わらなければならぬと自分に言い聞かせています。自分ができることから始めたいと思っています。

Profile

鈴木佳秀 学長 プロフィール

●最終学歴

クレアメント大学院 修了
(PhD in Religion)

●主な著書・翻訳

『ヘブライズム法思想の源流』(創文社)、
『これからの教養教育-「カタ」の効用』
(東信堂)、『神と国家の政治哲学』(NTT出版)、
『旧約聖書を学ぶ人のために』
(世界思想社) など多数。

可能性を広げて社会へ旅立つ

第一八回卒業式が三月一六日、聖籠町市民会館で行われました。会場には、思い思いの晴れ着を着た卒業生とご家族の方々が集まり、華やかな雰囲気になりました。昨年の卒業式は、東日本震災のため、急きよ会場を本学体育館としました。こうしてまた、聖籠町で式典を行えたことに感謝いたします。

式典では、鈴木佳秀学長から卒業生一人ひとりに、力強い握手と共に「卒業証書・学位記」が手渡されました。学長から卒業生には、昨年の東日本震災の体験を振り返り「震災の復興に多くの人が立ち上がった。どんな時も誰かのために生きる気持ちを忘れないで欲しい」とのメッセージが贈られました。また、式典の終わりには、後宮俊夫名誉理事長に名誉学位記の授与がなされました。

また、昨年に引き続き、学生、卒業生



卒業証書・学位記の授与



卒業を祝うハレルヤ・コーラス



後宮名誉理事長へ名誉学位記を授与



Keiwa HOPEによる募金活動



学生生活を共にした仲間と記念撮影

「失敗」は人生のスパイス

国際文化学科卒業

柴野 和記



「教師になりたい」という夢を叶えるために、この大学に入学した日のことが、つい昨日のことのように思えるほど、この四年間は充実していました。

入学当初は右も左も分からず、不安な気持ちで一杯でしたが、たくさんの方人や尊敬できる先生方と出会い、新しい知識や発見を重ねることで、そんな不安は消え、人間として一回りも二回りも大きく成長することができました。特に教職課程を通して学んだ知識

や言葉は、私の価値観や考え方を大きく変容させるものとなりました。

今も胸の中に強く残っている言葉があります。それは、「失敗は、成功のダシの素」という言葉です。振り返ってみて、学生生活において、成功よりも失敗から学んだことの方が多かった気がします。人生において失敗は付き物ですが、それをマイナスと捉えるか、プラスと捉えるかは、その人の裁量に委ねられていると思います。この大学において、失敗を恐れず、チャレンジし続けていく姿勢と、失敗から改善点を学び取り、成功への糧とする大切さを学べたことは、自分の人生において大きな財産であったと思っています。

失敗を自分の人生を豊かにしてくれる最高のスパイスであると信じ、新たな道を歩んで行きたいと思っています。

第一八回卒業式・卒業記念パーティーのご報告

による「被災地への募金」活動も行われました。皆さまからの暖かいお気持ちとして、二四、二八四円の募金が集まりました。たくさんのご協力ありがとうございました。

卒業式の後、新潟グランドホテルへ会場を移し、卒業記念パーティーが行われました。卒業準備委員が作成した、四年間の写真を使ったスライドショーが流され、参加した卒業生や保護者の皆さま、教職員とで楽しかった学生生活を思い起こしながら、語らいの時を持つことができました。締めくくりには、参加した卒業生たちが舞台上に勢揃いし、盛大な万歳三唱を行いました。

リベラル・アーツの学びを実践し、それぞれの持つ可能性を広げて巣立っていく卒業生たちが、希望の光となり、社会を照らしてくれることを期待します。



卒業準備委員の皆さん



体験入学者へ修了証を授与



みんなで乾杯！



学生と教職員で仲よく記念撮影



全員がステージに上がり万歳三唱

夢を信じて歩むための「希望」

卒業準備委員長

山田 愛



卒業アルバム用の写真を選んでいる時、新入生オリエンテーションで撮った集合写真を見つけ、四年前のことを思い出しました。愛知から引越したばかりだった上に、内向的な性格のため、写真の中の私は「この地でやっていけるのだろうか」と不安そうな顔をしていました。この時はただの同期という関係でしかなかった友人たちも一緒に写っています。あれから四年、すでに住み慣れた新潟の地でたくさんの

友人たちに囲まれ、今こうして卒業できる喜びをかみしめています。

楽しいばかりの四年間ではありませんでした。友人とぶつかり、ボラティアでは右往左往することもありました。勉強に疲れ、夢を諦めかけた時もありました。そんな時には少し立ち止まり、今まで希望を持って歩いてきた道を振り返りました。そして、奇跡が起きることを信じて、夢に向かってまた歩きはじめることができました。卒業アルバムタイトル「希跡」には、このような思いが込められています。

後輩の皆さんへ。辛い時こそ、自分や友人、先生方を信じて前を向いてください。また、つらい時に休めるように、私たちが卒業記念品としてペンチを贈ります。ぜひ活用して、充実した大學生を送ってください。

積極的に動いて得た成長



英語文化コミュニケーション学科卒業

計良 愛奈

敬和学園大学での四年間を振り返るとさまざま楽しかった思い出が昨日のことのように思い出されます。高校生活ではただ受け身の状態で学校行事に参加することが多かった私は、大学生活でももう少し積極的に活動してみたいという目標を持って、サークル活動に参加したり、敬和祭で屋台を出店して、多くの思い出をつくることができました。

その中でも一番心に残っていることは、アリゾナへの留学です。留学といっても、約三週間という短い時間で、引率の先生や友達と一緒に行動するものですが、私は現地の方と会話をすることができるとか不安でした。しかし留学先の学生やホームステイ先の方々が温かく接してくださり、忘れることのできない素晴らしい体験になりました。再びアリゾナへ行くという目標ができたことで、英語の学習意欲が高まり、私にとっても意義のあるものとなりました。

四年間で多くのことを学び、経験することで、学習面でも人としても一まわり成長できたように思います。敬和学園大学で得たことを活かし、これから社会人として成長し続けられるよう努力したいと思っています。

多くの出逢いと新たな自分の発見



国際化学科卒業

伊藤 佳奈子

私はもともと、さまざまなことに興味を持つ反面、フットワークが悪く、足踏みしがちだったため、後悔することがよくありました。そのため、入学前に「大学では失敗してもいいから勇気を出しているいるなことに挑戦しよう」と決めました。

四年間を振り返ると、本当にさまざまな経験ができたと思います。教職課程サークル活動、学内行事、アルバイトなどを通して、多くの出逢いがあり、新たな自分を発見できました。また、いずれの活動も長期で続けることができました。時にはつらい思いをすることもありました。時にはつらい思いをすることもありましたが、それを乗り越えられたのは、家族をはじめ、友人や先生、職員の方々などが、私を支えてくださったお陰だと強く感じています。私は、そんな方々の優しさに甘えてしまいがちですが、これからは社会人として、自分の行動に責任を持ちながら毎日を笑顔で過ごし、周りの方々を安心させることで、恩返しをしたいと思っています。

大学で過ごした四年間は私にとって宝物です。敬和学園大学に入学できたことを幸せに思います。ありがとうございました。

大学が地域の力になるといって



共生社会科学科卒業

後藤 アイ

「敬和はいい教育をしているぞー」という、恩師の言葉を後押しに入学して、あっという間に四年間が過ぎてしまいました。

シニア入学の私は、自分の子どもよりもずっと若い学生と一緒にやっていたらどうだろうか、勉強はついていけるだろうか、不安を抱いて入学しました。しかし、その不安はすぐに消え、先生方の優しい指導や、若い学生たちとの語らいに、毎日がとても充実していききました。特に講義は、求めていた「知る喜び」を十分に満足させてくれました。

そして、気が付いたころには、十二歳市で敬和鮮魚店をやり、「まちカフェ・りんく」で「いらっしやいませー」と、コーヒーを入れていました。どちらも敬和学園大学が、地域の活性化に一役を担おうという取り組みです。両方に参加することで見えてきたものがあります。それは、地域の疲弊が進んでいるということ、その疲弊したコミュニティは若い力を求めているということ、そして、敬和はその力とならなければいけない大学だということ。今後は、新潟医療福祉大学大学院の修士課程に進学し、地域福祉の研究をしてまいります。

就職支援の試み

合同企業説明会のご報告

来春卒業学生の採用活動が高まる中、二月一七日、恒例の学内合同企業説明会が開催されました。厳しい雇用状況、また例年にないだ大雪の中、昨年を上回る数の企業（八〇社）にご参加いただきました。「マンツーマンでゆっくりとお話を聞くことができ、各企業をよく知ることができた」、「これまで知らなかった興味を持てる企業との出会いがあった」と学生たちから感謝の声を聞いています。

四・五月は採用活動のピーク。一方、卒業間際まで「就活」が継続することも珍しくありません。心身共にたくましく、前向きに。一人で悩まずにキャリアサポート課に相談することから始めましょう。
(就職委員長 杉村)



学内開催で、安心してお話ができました

たくさんの方の支えで得た合格



共生社会学科卒業
野澤 ともこ
(新潟市役所内定)

私は、新潟市役所の社会福祉から採用をいただきました。社会福祉を目指したのは、自身の経験を活かし心に傷を負った子どもたちの力になりたいと考え、大学入学資格検定を取り、大学進学を考えたときでした。遠回りをしましたが、夢への一歩を踏みとることができました。

公務員試験の筆記試験は、受ける分野によって試験内容が変わってきます。私は、専門分野が福祉、心理、共通が一般教養でした。試験対策としては、ダブルスクールを活用しました。筆記試験をクリアすると適性試験と作文、集団面接と個人面接と進んでいきます。勉強をすめる中で、これでいいのか、落ちたらどうしようかと不安や焦りがありました。しかし、家族や友人、たくさんの方々を支えられながら合格を得ることができました。

後輩の皆さん、ぜひボランティアやさまざまな活動に参加してください。そこでの出会い、自分の新たな一面の発見は、公務員試験だけでなく企業への就職活動にも役に立つと思います。そして就職活動は一人ですべてではなく、たくさんの人たちが支えてくれていることを忘れずに、最後までがんばってください。

厳しかった就職戦線



英語文化コミュニケーション学科卒業
長谷川 優
(新潟みらい農業協同組合内定)

私たちは、東日本大震災という未曾有の災害が起きた中で就職活動を行いました。それは一昨年の就職超氷河期を上回る厳しい就職戦線でした。

私が就職活動を終えたのが昨年末、およそ一年間という長い時間を就職活動に費やしました。その過程において、多くの失敗を繰り返し苦労しました。しかしその過程があつて、無事内定を勝ち取ることができたのだと感じています。

二〇一三年度からは、企業の採用スケジュールが変わり、就職活動が一変すると聞いています。より短期決戦になり、学生側は今まで以上に志望業界・企業を絞らないといけなくなると思います。私ができるアドバイスはとにかく早期に就職活動を始めることに尽きます。

就職活動は自分との戦いです。自分がかななければ何もはじまりません。そして、自分の立ち位置を考えるべきです。妥協すればいくらでも仕事はありますが、これからの将来にかかわる重要なことです。就職活動をしている人、これから始める人は今一度、将来を見据えて、自分の働く姿を想像してはいかががでしょうか。きっと何か変化があるはずですよ。

アジアの若者たちと交流を深める

アジア・ユース・フォーラムに参加

一月に開催された「アジア・ユース・フォーラム(A Y F)」に、敬和学園大学から、グッドマーカー先生の引率で、学生三名が参加しました。今回で九回目になったA Y Fには、韓国、タイ、インドネシアなどのアジア各国から約九〇名の若者が集い、異文化理解や各々の国の社会問題などについて議論を交わしました。自由時間には台北市内で買い物をしたり、台湾の観光地を巡ったりして、交流を深めました。



日本の食についてプレゼンテーション



台湾観光 (中正紀念堂)



参加したアジアの仲間たちと



英語文化コミュニケーション学科卒業
滝沢 亮

A Y Fには、もともと異文化交流に興味があり、自身の英語力を試したいという思いから、参加しました。難しい社会問題などの議論では、自分の英語理解力が足りずに悔しい思いをしましたが、文化も言語も異なる同世代の若者との交流は、大変貴重な体験でした。

四月からは社会人となりますが、自分が「できないこと」にとらわれず、チャンスを見逃さないように「今自分ができること」を精一杯やっていきたいです。



英語文化コミュニケーション学科二年
吉田 夏海

A Y Fはさまざまなことを私に教えてくれました。まずは、自分の小ささ。他の参加者は、母国語ではない英語を使って、難しい社会問題について話し合います。私は話についていくのが大変でした。そして、アジアの仲間の大きさ。私の言葉にちゃんと耳を傾け、そして私の理解できない単語は優しい言葉に言い換えてしっかり説明してくれます。

A Y Fはとても刺激的で、世界の広さにワクワクできる場所でした。



英語文化コミュニケーション学科
研究成果発表会

英語文化コミュニケーション学科の研究成果発表会が二月七日、国際文化学科の卒業論文発表会が二月二二日にそれぞれ行われました。

例年、英語文化コミュニケーション学科は、この時期に卒業論文発表会を行っていましたが、今年からは形式を変えて、学年を越えて研究成果を共有できる場として、一年生から四年生が参加する発表会として開催しました。各学年ごとに教員から推薦された学生たちが、研究成果のみならず、海外での国際交流活動の報告など多岐にわたる発表を行いました。それぞれの発表に対して活発な意見交換が行われ、学生と教員とが、アカデミックな話題を中心に、親しく交わるよい機会となりました。

国際文化学科は、これまでゼミごとに行っていた卒業論文発表会を、

大学で学ぶ意義をつかむ

先輩たちが続くのはあなたです!

教職課程での学び

自分を与えるという人と

二〇〇四年度卒業
廣澤 卓郎

敬和学園大学では、中学校教諭一種免許状（英語、社会）、高等学校教諭一種免許状（英語、公民）を取得でき、二〇二二年度からは高校の「地理・歴史」の課程を増設します。小さな大学であることの強みを生かし、超少人数制の授業や全国的にも珍しい二回にわたる教育実習（英語）、地元中学校でのインターンシップ（学習支援活動）、国立妙高青少年自然の家宿泊研修など、教員をめざす学生を細やかにサポートする充実した体制を整えています。

本年四月からは、卒業生の廣澤さんが、正規の教員として新潟県で高等学校の教壇に立つことになりました。

（教職課程委員長 川又）



妙高での宿泊研修

私は、敬和学園大学を卒業後に、再び科目等履修生として教職課程に入りました。そこで自分の課題としたのは、自身のコミュニケーション能力を向上させることでした。

特別支援学校で実習をさせていたいたい時のことです。私は一人の男子生徒と並んで座って休憩していました。その生徒には重度の自閉症があり、人との関わりに困難を持っていました。私はそんな彼に何を話したらいいか分からず、黙っていました。そんな時、その生徒が突然「今日は暑いですね」と言ってきたのです。私は驚くと同時にうれしくなりました。彼は私の気持ちを察して、話すきっかけをくれたのです。

私はその生徒から、コミュニケーションとは、相手に自分を与えることだと教えられました。彼が話してくれたおかげで私は自分の存在が彼に認められているのだと知りました。そしてその時からとても安心した気持ちでいられたのです。

教員採用後はさまざまな生徒との関わりがあるでしょう。私はこの特別支援学校で学んだことを忘れず、生徒たちに自分を与え続けていきたいです。

研究成果・卒業論文発表会

今年から学科として合同で開催しました。卒業論文を指導した教員の推薦により選ばれた学生たちが、それぞれ異なる専門分野の論文を発表しました。参加した学生と教員の間で議論を深めていくことで、発表者のみならず、参加学生それぞれに、学際的な発見があったのではないかと思います。

いずれの学科も、学生たちが今後の研究を推し進めるための新しい試みに取り組み、これまで以上に、学生と教員が語り合うことができる貴重な場を提供することができました。自分自身で問題を探し、その問題について考え、調べ、答えを発見する能力を身につけることは、大学で学ぶことの大きな意義です。これからも、より多くの学生がこのことを体験できる場の提供をすすめていきます。



国際文化学科卒業論文発表会

素晴らしい母校に心から感謝を込めて



英語文化コミュニケーション学科

平塚 博子

敬和学園大学には、五年間お世話になりました。授業はもちろん、有志の学生とがんばったTOEIC勉強会、そして地域の方々と共に学びを深めた新発田学研究センターなど、地域に根ざした小規模で自由な、敬和ならではのさまざまな経験をさせていただきました。

敬和での教育活動を通じて、私自身が教員として多くのことを学ばせていただきました。学生と向き合うことの大切さと同時にその難しさ、四年間の学びの中で大きな成長を遂げていく学生たちを近くで見守る喜び、そして巣立ってゆく学生たちを送り出す時の一抹のさみしさなど、こうした大切に素敵なことのひとつひとつを、私に教えてくれたのが敬和学園大学でした。このような意味で敬和は私にとって大切な母校です。今も驚くのは、数多くの卒業生が日々大学に遊びに来ることです。卒業しても訪れたいくなる暖かい大学の一員として働けたことは、私にとって大きな幸せでした。

四月から首都圏の大学に籍を移しますが、敬和で学んできたことを糧とし、またがんばっていききたいと思います。皆さまに心から御礼申し上げます。退職のあいさつとさせていただきます。

新発田の地に根付いた活動を



共生社会学科

川本 健太郎

現代社会には、貧困や環境破壊、ストリートチルドレンや障害者、ホームレスなどをはじめ、社会的に不利な状況で生活することを余儀なくされている人々がたくさんいます。これらの社会的排除による問題は、今の行政やNPO、企業などの既存の社会資源やシステムでは解決することが難しいケースも多く、世界規模で広がる経済的情勢の悪化に伴い、年々深刻さを増しているのが実情です。

私が専門としている「社会起業」は、これらの社会課題と向き合い解決を目指すため、新たな事業や社会資源を開発する意味やその方法を考えることであり、利潤の最大化を目指すための起業とは異なります。経済学や経営学などの学際的な理論的基盤と共に「起業する」「経営する」という実践的で応用的な教育を展開できる教育体制が必要です。

ここ敬和学園大学のリベラル・アーツに基づく学際的なカリキュラムと、新発田学研究センターや「まちカフェ・りんく」など実践教育と地域貢献を目指した取り組みに大変強い関心を抱いています。これから新発田の地に根付いて、皆さんと一緒に活動できることを楽しみにしています。

学生の顔が輝く瞬間



人文学部

ジュテイス・カンバラ

はじめまして。私は暖かい陽のふりそぐフロリダの出身です。沖縄で一〇年間暮らした後、昨年、雪深い新潟にやってきました。メリーランド大学でアジア研究を専攻し卒業した後も勉強を続け、社会学と英語科の教員免許を取得しました。高校、中学校で社会と英語を教えると同時に、主に沖縄在住の日本人成人を対象に英語を教えていました。教える相手の年齢やレベルに関係なく、私は「教える」ということが大好きです。教育者としての私の使命は、学生一人ひとりが何かしら成功できると実感できるお手伝いをするのだと思っています。学生の顔に「わかった!」という表情が突然輝く時が、一番うれしい瞬間です。

仕事以外では、写真と旅行が大好きです。被写体となる面白いモノや人を探したり、夫と旅行に出かけたりしています。敬和学園大学のキャンパスを訪れて気付いたのは、学生と教員がお互いに温かく元氣にあいさつをしていることです。私もまた敬和の学生さんたちとよく知り合って、一人ひとりの必要に応えられるようベストを尽くしたいと思いません。今年、皆さんの仲間に加えていただけることをうれしく思っています。

学生ボランティア Keiwa HOPE

現地ボランティア活動のご報告

英語文化コミュニケーション学科卒業 長谷川 貴拓たかひろ

三月一日から三日間、宮城県気仙沼市大島で、第三回目の現地ボランティア活動を行ってきました。災害対策本部の指示の下、中学生が養殖体験をするための養殖筏を作るお手伝いや、漁具を置くための空き地整備などをさせていただきました。すでに復旧にむけた作業ではなく、復興にむけた作業へと変化していましたが、まだまだ復興への見通しが立たない方も多いそうです。今回の活動は、第二回の宮古市での活動でお世話になった方からのお誘いで実現しました。まだまだ私たちができること、すべきことはたくさんあります。後輩の皆さんには、これまで得た人脈から、今後も活動の輪を広げてくれることを期待しています。



一緒に活動した皆さんと（亀山展望台）

文学で地域おこし

第四回「阿賀北口マン賞」授賞式

第四回「阿賀北口マン賞」授賞式および、まちの駅よろず「新発田学研究センター」開所五周年記念講演会を三月二日、新発田市地域交流センターにて開催いたしました。

作家のデビット・ゾペティ氏によるユーモアに富んだ講演会の後、加藤宗哉氏（作家・「三田文学」編集長）と小黒晴美氏（ドイツ語研究者）を交えた対談が行われました。創作意欲を高める地方の魅力や「越境文学」という考え方の問題点などに話がおよび、文学談義を通して至福の時間を過ごすことができました。そして、授賞式では、受賞者の皆さまより喜びの声が聞かれました。

たぐきさんのご来場ありがとうございました。
（新発田学研究センター）



「阿賀北口マン賞」受賞者の皆さま

学事予告

◆四月◆

- 一 日学年始め
- 四 日入学式
後援会総会
- 五 日プレイスメントテスト
健康診断（六日まで）
- 九 日新入生歓迎公開学術講演会
- 一〇日履修相談日
- 一一日前期講義開始
履修登録期間（一七日まで）
- 一六日学費前期納入最終日
（一〜四年）
- 一九日新入生オリエンテーション
（二〇日まで）

◆五月◆

- 一九日高校生向け英検対策集中講座①
- 二二日新潟市北区オープン・カレッジ①
- 二七日新発田朝市十二齋市
- 二九日新潟市北区オープン・カレッジ②

◆六月◆

- 二日スポーツ大会
- 五日新潟市北区オープン・カレッジ③
- 一二日新潟市北区オープン・カレッジ④
- 一六日敬和学園高校対象オープンキャンパス
- 一七日オープンキャンパス
- 一八日創立記念日
- 二七日教員対象進学説明会
- 三〇日高校大学合同研修会



感動を届ける仕事



二〇〇四年度卒業

小林 和美

私は、大学卒業後、ウエディングプランナーとして勤務しております。現在はチーフプランナーとして新人スタッフの教育、責任者を任せられております。

今の時代はインターネットが普及し、指先を動かすだけで何でも調べることができます。多種多様化しているニーズ、ふと気を抜くと移り変わる流行。お客さまのニーズや現代の結婚式事情、トレンドをいち早くキャッチし、その方に合ったオリジナルティ溢れる結婚式に仕上げるのが私たちの仕事です。プランナー同士のディスカッションはもちろん、さまざまな分野の方と接して自分自身の感性を高めています。緊張や心配もありませんが、新郎新婦さまから、「ありがとう」「担当してもらってよかった」等とおっしゃっていただけることで、この仕事を選んで続けてきてよかったと感じます。

華やかなイメージを抱いて臨んだ一年目。思い描いていたイメージとのギャップに苦しんだ時もありました。八年目を迎えた私が今一番に思うこと、それは、「やらなくてはいけない」ではなく、「やったらうれしい」こととして日々業務に取

り組むことです。人に言われて行うのではなく、相手の立場になり、どうしたら喜んでいただけるか、感動していただけるかなどと考える毎日は、充実したものとなっております。

苦しい時期、私を支えてくれたのは、学生時代の友人でした。また、茶道部で培った礼儀作法も活かしているのではないかと思っています。母校で過ごした貴重な経験を活かし、今後は、もっともつと皆さまに結婚式はいいものだと思っただけなく、また、このプライダルという日本の貴重な文化を大切にし、業務に励んでいきたいと思えます。

学生の皆さまには、まだまだいろいろな選択肢があると思います。どんな道を選ぶかも重要ですが、選んだ道でどれだけがんばれるかも大事だと思います。社会人としてこれから羽ばたく皆さまのご多幸をお祈り申し上げます。



担当した新郎新婦さまと一緒に

寄付者ご芳名

(二〇二二年二月一三日現在、敬称略)

〈一般〉

阿部 誠衛、星名 剛、川崎 和雄
 柏森 芳子、北島万紀子、小島 一則、
 村山 国弥、中村 佐保、西八條敬洪、
 坂上 富男、笹川 寛、佐藤 進、
 相馬 文子、田坂ゆたか、渡邊 敏子、
 山田 いく、山田トシ子、横山キミイ、
 東中通教会婦人会、
 国際ソロプチミスト新潟、はまなす、
 経堂緑岡教会、
 日本キリスト教団東中通教会、
 日本キリスト教団新潟地区世界宣教委員会、
 新潟教会婦人会、新潟信濃町教会、
 新潟YWCA、
 (社)高倉ひかり保育園 理事長永倉信嗣、
 在日本インターボード宣教師社団

〈卒業生・在学生・保護者〉

今井 正仁(一)、小山 朋子(一)、
 新田 和子(一)、吳賢欄(三)、
 佐藤 浩雄(四)、山本 恵嗣(一一)
 〈学園関係〉
 鷹澤昭一、高田 茂、後援会(二)

(一)内、漢数字は期生、算用数字は回数

本学にお寄せくださいましたご支援・ご厚意に心より感謝申し上げます。

1 January

- 5 講義再開
6 チャペル・アッセンブリ・アワー②
説教 宇田川潔 事務局長「分け与える生き方」
講話 藤野豊 教授
「南の無人島で考えた平和と人権」
- 11 教授会
卒業論文提出締切日
- 13 AO 入学試験 (3期) 合格発表
チャペル・アッセンブリ・アワー⑦
説教 大澤秀夫 宗教部長「新しい心」
講話 久島公夫 教授「スポーツと健康」(写真①)
- 14 大学入試センター試験 (~15日)
16 留学生交流・餅つき大会 (100名)
20 チャペル・アッセンブリ・アワー⑧
説教 鈴木佳秀 学長「内なる人と外なる人」
後期エッセイ・コンテスト授賞式 (写真②)
ケリー・ニューエル 奨学金授与式
後期資格取得奨励奨学金授与式
- 教職課程報告会
26 後期講義終了
理事会
- 27 後期末試験 (~2月3日、13~15日)
29 一般入学試験 (A日程)、外国人留学生入学試験 (1期)
第24回社会福祉士国家試験 (朱籠メッセ)



2 February

- 1 教授会
3 一般入学試験 (A日程)、外国人留学生入学試験 (1期)、
大学入試センター試験利用入学試験 (1期) 合格発表
相談援助実習報告会
フィールドトレーニング報告会
中学校インターンシップ報告会
- 5 春期休暇 (~4月3日)
6 後期集中講義 (~10日)
7 英語文化コミュニケーション学科研究成果発表会
- 10 人文社会科学研究所共同研究 戦争とジェンダー表象研究会
「欧米・アジアの戦時大衆メディアに見る
「国民」とジェンダー秩序再構築の国際比較研究」
(~11日、新潟大学ときめいと、52名)
- 16 後期末追試験
Keiwa HOPE 報告会 (写真③)
17 学内合同企業説明会 (80社、写真④)
一般入学試験 (B日程)
- 22 国際文化学科卒業論文発表会
臨時教授会
- 24 一般入学試験 (B日程)、AO 入学試験 (4期) 合格発表
28 再試験 (~29日)



3 March

- 1 図書館蔵書点検 (~3月22日)
2 第3回 Keiwa HOPE 現地ボランティア活動
(~4日、宮城県気仙沼市、学生5名、教員1名)
大学入試センター試験利用入学試験 (2期) 合格発表
- 3 第4回「阿賀北ロマン賞」授賞式
まちの駅よろず「新発田学研究センター」
開所5周年記念講演会・対談
総合テーマ「地域、文学そして想像力」
講師 デビット・ソパティ 作家 (写真⑤)
対談 デビット・ソパティ 作家、
加藤宗哉 作家・「三田文学」編集長、
小黒晴美 ドイツ語研究者
(新発田地域交流センター、69名)
- 7 教授会
9 ボランティアコーディネーター養成講座 (入門編)
講師 妻鹿ふみ子 日本ボランティアコーディネーター協会理事
- 13 一般入学試験 (C日程)
14 臨時教授会
15 一般入学試験 (C日程)、
大学入試センター試験利用入学試験 (3期) 合格発表
第24回社会福祉士国家試験合格発表
- 16 第18回卒業式 (聖籠町町民会館、写真⑥)
卒業記念パーティー (新潟グランドホテル)
- 21 AO 入学試験 (5期、~22日)
22 理事会・評議員会
23 AO 入学試験 (5期) 合格発表
31 学年終わりの



北垣宗治初代学
長が、2011年秋
の叙勲で瑞宝中
授章を受章され
ました。おめで
たうございます。



お祝い会にて

Gems in KEIWA

チャレンジ学生ファイル Vol. 37

認めてもらえた私の歌声

共生社会学科卒業
神田 那実



敬和祭での学生ライブ (右が神田さん)

私が音楽に興味を持ったのは、ほんの些細なきっかけからでした。

高校3年生の時に、友人に誘われ何気なく始めたバンドで、初めて人前で歌を歌いました。大学では、高校時代の歌を聴いてくれていた先輩に誘われ、断りきれずに1回だけという約束で、軽音楽部の校内イベントに出ました。誘われた時は、真剣に音楽をやるつもりがなかったので正直困りました。でも、やると決めたからには、一生懸命練習に励みました。そのイベントが終わり、友人や先生に声をかけてもらったり、一緒に演奏した人たちとやり遂げたことがとても楽しく思え、正式に軽音楽部に入部しました。それからは、学内だけでなく、他大学のイベントに行ったりと活動の幅を広げていきました。大学という枠から抜け出し、たくさんの人に自分の歌を聴いてもらうことができ、私にとって歌を歌うということが、だんだん生活の中心となっていきました。

大学を卒業し、歌う機会も少なくなりますが、これからも音楽を続けていきたいと思っています。



敬和学園大学の最新情報

敬和学園大学

検索

www.keiwa-c.ac.jp

